

レールモントフの叙情詩について

白 倉 克 文

基礎教育課程

On Lermontov's Lyric Poetry

SHIRAKURA Katsufumi

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 7, 2008 ; Accepted January 10, 2009)

はじめに

ミハイル・ユリエヴィチ・レールモントフ（1814-41）はプーシキン、ゴーゴリと共に、近代ロシア文学の樹立者の一人に数えられる。彼の著作は存命中の19世紀前半から今日に至るまで、広範な読者を獲得してきた。9歳年下のナロードニキ理論家ラヴローフは終生彼を崇拝していたし¹⁾、作家チェーホフは手紙や日記で彼の文章をしばしば引用し、シェイクスピア、プーシキン、トルストイと並ぶ大作家の一人に数えている²⁾。画家ヴルーベリは叙事詩『デーモン』を幻想的な絵画に移し変え、グルジア出身の映画監督パラジャーノフは民族色豊かな幻想物語『アシク・ケリブ』を映像化した。彼の作品は今もロシアで親しまれており、その文章は時々マスコミで引用されている³⁾。

27年の短い生涯の中で、レールモントフは様々な領域で創作活動を展開した。それは2001-02年に刊行された10巻本全集⁴⁾の構成から一目瞭然である。第1、2巻が叙情詩、3、4巻が叙事詩、5巻が戯曲、6巻が散文、7巻が書簡、そして8巻は絵画から成っている。因みに第9巻は雑文と家系関連の記録、10巻は年譜、追補、および知人たちによる回想類である。彼の著作としては小説『現代の英雄』、叙事詩『商人カラーシニコフの歌』や『デーモン』、及び戯曲『仮面舞踏会』などが著名であるが、これらと同程度に重要なのが、生涯にわたって書き続けられた叙情詩である。

新版全集に収録された叙情詩は全部で389点あり、これがほぼ全作品と考えられる。作詩時期の特徴として挙げられることは、1832年までの初期に非常に多くが書かれ、1833年から1839年までの中期が比較的少なく、晩年の数年に再び増加していることである。レールモントフは初期から最晩年に至るまで作詩を続けていたわけであり、その意味で、彼の思想と心情を多面的に理解するた

めに、叙情詩は最も有効な研究対象であると見なされる。

本全集の画期的特徴の一つは、絵画に一卷が当てられたことである。そこにはレールモントフが生涯に描いた絵画のほぼ全てが、詳しい解説と共に紹介されている。叙情詩と同様、彼は生涯にわたって描画に携わったのである。叙情詩（＝リリック）の定義を、「外界の事象によって誘発された作者の感動を直接に表現した詩」⁵⁾として捉えるならば、絵画は叙情詩と多くの共通点を有している。それ故に、彼の叙情詩を考察するに際しては、彼の絵画を比較対照する視点も有益と思われる。

叙情詩は自身の体験に即して作られる場合が多いが、レールモントフは自己の体験を殊更強く自作に反映させた作家として知られている。「彼は自分の生き方を自作にそのまま描いた。作品はきわめて主観的であり、詩人自身の性格や生涯と何らかの関係を持たないような作品は、多分一つも見出すことができない。」⁶⁾ 新版の伝記『レールモントフの生と死』（2007年）の編集者は、前書きにこのように記している。そこで叙情詩の考察に入る前に、彼の生涯を簡単に辿っておきたい⁷⁾。

まず出生から少年期に関してである。父ユーリ・ペトロヴィチ・レールモントフはスコットランド系の貴族で陸軍大尉であったが、結婚した時にはすでに経済的に零落していた。母マリヤ・ミハイロヴナは富裕な貴族アルセーニェフ家の出身であり、二人の間に1814年10月に生まれた子供が後の詩人ミハイル・レールモントフである。ミハイルが2歳の時に母が病死し、その後彼は母方の祖母エリザヴェータ・アルセーニェヴァに養育された。彼女は孫を溺愛したが、外国人家庭教師をつける等して、彼に国際的な教養を体得させた。ドイツ人の養育係はドイツ語を教え、ドイツの物語を話した。フランス人家庭教師はナポレオンに纏わる物語を語った。ユダヤ人の家庭教師からもドイツ語を学び、イギリス人家庭教師からは英語を学んで、バイロンやシェイクスピアの原書と触

れることもあった。一方で彼はピアノやヴァイオリンを習い、絵を描き、操り人形劇に親しんだ。幼少時代を祖母の領地ペンザ県タルハヌィで過ごしたが、この時期に3度にわたるカフカース行きを体験している。父と祖母は敵対しており、特にミハイルの養育をめぐる反目し、両者の争いは父の死亡の1831年まで続いた。この軋轢はミハイルの性格形成に暗い影響を及ぼした。伝記作家スカビチェフスキーは次のように記している。「レー尔蒙トフが経験したこのドラマは、悉く彼の性格に深い傷跡を残した。彼は自分に閉じこもり、沈思した。自分に特に大切に神聖な事柄は全て他人に隠す習性が、彼には生じた。最も深刻で陰惨な思念が心を占めていた時でさえも、のんきなひょうきん者、道化者、腕白者として振舞った。」⁹⁾ 内面と外面の乖離、思念と行動の不一致が、彼の性格に定着していったのであろう。父の死後、祖母は潤沢な生活費を絶えずレー尔蒙トフに提供し、彼の死後まで生き延びた。

次に彼の学校教育についてである。1828年9月にモスクワ大学付属寄宿中学校に入学し、1830年4月に同校を卒業。同年9月にモスクワ大学に入学したが、1832年6月に同大学を退学した。コレラの蔓延による授業の停止、教授排斥運動への関与、別の教授の知識不足に対する告発等々、それは波乱に満ちた大学生活だった。スカビチェフスキーは当時の彼を次のように特徴付けている。「レー尔蒙トフの中にはかの悲惨な分裂性が見られる。それは彼の同世代全員の宿命であったが、彼の特殊な教育や環境の結果として、また彼の天性そのものの結果として、彼において最も先鋭化していた。善良でやさしく、愛情豊かな若者だったが、極端に多感で、愛情や厚情に悉く敏感に反応し、恋と友情を渴望していた。激烈な熱情と共に、情緒的な空想癖を備え持っていた。」⁹⁾ モスクワ大学を退学したレー尔蒙トフは、1832年11月にペテルブルグ近衛騎兵学校に入学した。文系大学から士官学校への転学は、彼にとって大きな転機となった。スカビチェフスキーはこの頃の彼の心境を次のように説明している。「自由奔放で甘やかされてきた若者が……個人的自由が全て圧殺される環境に突然投げ出された。……間もなくレー尔蒙トフは手足の束縛を覚える羽目に陥った。その上彼の傲慢な魂は、事あるごとに最も屈辱的な侮辱を耐えねばならなかった。」¹⁰⁾ しかしレー尔蒙トフは新しい生活に溶け込もうと努力し、勇敢な軍人になるべく奮闘した。2年後の1834年秋に見習士官から騎兵少尉になり、軍人としての前途が拓けた。

最後は軍人としての経歴についてである。1834年11月から近衛騎兵連隊での生活が始まった。勤務地はペテルブルグ郊外のツァールスコエ・セローであり、しばし

ば社交界に出入りし、歓楽にも耽った。しかし1837年1月に詩人プーシキンが決闘で死亡した直後、レー尔蒙トフの運命は急転し、それ以降首都とカフカースを往來する生活が始まった。彼は宮廷貴族への批判を含む詩「詩人の死」を作り、それが巷に流布して官憲の目に触れ、取調べを受けた。その挙句ニジェゴロド連隊への配転が命令された。3月にペテルブルグを發って、カフカースに赴き、半年余り後の1838年1月にペテルブルグに戻った。2月半ばにノヴゴロド県グロドネンスキー近衛騎兵連隊に配属されるが、5月半ばにはツァールスコエ・セローの近郊ソフィアで宿営中の近衛騎兵連隊に転任した。この年の10月11日には、敷設されて間もないツァールスコエ・セローとペテルブルグ間の鉄道乗車を体験している。1839年には陸軍中尉に昇進したが、翌1840年2月に、フランス公使の息子エルネスト・ド・バラントと舞踏会で衝突し、決闘を申し込まれた。決闘でレー尔蒙トフは軽傷を負っただけだったが、逮捕されて軍法委員会にかけられ、テンギン歩兵連隊への転属を命ぜられた。5月初旬にペテルブルグを發って、6月にスタヴローポリに到着し、実戦部隊であるカフカース戦線左翼に配属された。9月まで実戦に参加し、ヴァレリク川では激烈な対チェチェン戦を体験した。1841年1月に2ヶ月の休暇が認められて、モスクワやペテルブルグで過ごし、文学に専念すべく、退役の手立てを講じたりもした。しかし4月11日に首都からの退去命令を受け、再びカフカース生活を始めた。しかし間もなくピャチゴルスクで、かつての友人マルトウイノフと夜会で衝突し、決闘を申し込まれた。この決闘でレー尔蒙トフは7月15日マシューク山麓で死亡した。

以上が短くも波乱に満ちた彼の生涯の概要である。彼が青春期を過ごした時期はニコライ一世の治世と重なり、デカブリストの乱が終結した後の暗い反動期であった。この時期はまたロシアが征服戦争を続けた時期でもあり、カフカースでは山岳民族との間に激しい戦闘が繰り返られていた。そうした時代背景の中で、彼の叙情詩の創作は1828年から死の直前まで続けられた。それは学生時代と仕官時代の約13年間に当たる。当然のことながら、彼のすべての叙情詩は当時のロシアの時代状況を反映しているし、また、生涯に生じた様々な個人的事件と絡み合っている。

レー尔蒙トフの叙情詩の検討に際して、それを大きく二つのグループに分類し、第一のグループを外向的叙情詩、第二のグループを内向的叙情詩と名づける。この分類と命名は筆者の便法であって、厳密な区分ではない。予め大まかに説明しておくならば、外向的叙情詩には、外界と積極的に触れ合う開放的な雰囲気の商品が含まれ、

内向的叙情詩には、内面に沈潜した、空想的もしくは思索的な作品が含まれる。両者への分類は、レールモントフの性格の二面性を前提としている。しかし彼の叙情詩にはパロディ詩、寓意詩等々、両グループに分類できない作品群がある。そしてそれらの多くは、レールモントフが東西両文化を受容する過程において作詩された。そこでこれらを第三のグループとして位置づけ、彼による東西文化の内在化と関連付けて論じてみたい。

I 外向的叙情詩

レールモントフが相反する二面的な性格を備えた作家であることは、古くから今日に至るまで、しばしば指摘されている。前掲の新版伝記の前書きには、次のような性格描写が挿入されている。「彼の人格には、極めて多様でしばしば互に対立する性格が複雑に絡み合っていた。人生を『空虚で馬鹿げた笑劇』と称しつつ、彼はその快楽を満喫した。社交界を蔑視しつつ、そこでの成功を全力で求めた。時には侮辱にも等しい過度の毒舌によって周囲の人々を怒らせつつも、善良で繊細な心を同時に併せ持っていた。」¹¹⁾ 生に対する肯定と否定の二面性は多少なりとも万人に共通しようが、彼の場合にはそれが極端な形態をとっていたものと思われる。人間好きで明るい、積極的で行動的な側面を表現した作品群を、外向的抒情詩と称し、鑑賞してみよう。そこではレールモントフの繊細でやさしい心情が、周囲の諸個人や祖国ロシアに、そしてカフカースの自然に対して解き放たれている。

1. 個人に寄せた叙情詩

「ちじれ毛の男の子のようにびちびちして 夏の蝶のように おしゃれさん。意味のない言葉も 彼女の口から発すれば 愛想よさがみなぎる。同じものをいつまでも好きではいられない。習慣なんて 鎖のように耐えがたい。彼女は 蛇さながら するりと身をかわし 小鳥となって すばやく飛び回る。(後略)」(2-85, II-206)¹²⁾

これは一人の少女を描写した「ポートレートに」と題される詩である。この詩を読むと、読者は天真爛漫でおしゃまな女の子の姿を思い浮かべることができる。この詩の最後は、「彼女を理解することは 不可能だが しかもなお 愛さずにはいられない」という印象的な表現で結ばれている。ここまで読んで読者は、自分がかつて味わった体験を思い起こすこともあるかもしれない。「なにゆえに」と題された詩では、もう少し成長した女性が歌われる。今は幸せに輝いている少女を眺めつつ、レールモントフは、彼女が将来受けるであろう苦しみを予感して、次のように歌い込む。「わたしは悲しい な

ぜなら君を愛しているから。(中略) 私は悲しい なぜならきみが嬉しそうなのだから。」(2-75, II-203) 微妙な対人感覚であるが、しかしこれもやはり多くの人々が人生の折節に味わう感慨であって、この詩を読む人は知らず知らず詩人に共鳴してしまう。

このように、レールモントフの叙情詩の中には、自分のありのままの感情を直截に表現したものが多くある。その対象は赤子であったり子供であったり、同僚であったり先輩であったり、様々である。しかし一番多いのは、やはり女性であり、特に二人称が巧みに使用された作品が目につく。例えば「スミールノワに」と題されたものがある。「あなたがいないと あなたにいろいろと話したくなります。あなたがいると あなたのお話を聞きたくなります。それなのに あなたは 黙っていかめしく眺めるばかり。だからわたしも どきどきして黙っています! どうすればいいでしょう? たくまぬ言葉で あなたの理性を占領することは わたしにはおよびません。こんなことはすべて とても滑稽なはずなのです。もし

こんなに悲しい気持ちでなかったのなら。」(2-84, II-205) これが詩の全文であるが、この短い表現の中に、相手と自分との微妙な関係が的確に表現されている。これらの叙情詩は優れたスナップ写真と似ており、人生の大切な一コマを切り取って、言語に定着させている。そしてそこでは多くの場合、比喩表現が印象深く使用されている。「わたしたちはお別れしたけれど」で始まる詩では、歳月を経ても記憶に留まる女性の面影が次のように表現されている。「わたしたちはお別れしたけれど あなたの面影がわたしの胸の中に生きています。(中略) たとえ打ち捨てられても 神殿にはかわりなく たとえ打ち倒されても 神の御像にはかわりないように!」(2-46, II-164) この詩はチェーホフが日記や手紙に引用しているし¹³⁾、作曲家スピロによるロシア・ロマンスとして歌われてもいる。レールモントフの印象的な言語表現は作曲家たちの創作意欲を誘い、例えば同時代の作曲家ダルゴムィシスキーは「気ぶさぎと悲しみと」、「祈り」、「なにゆえに」などの詩に曲をつけ、優れた歌曲に仕上げている。

即興的に作られるレールモントフの叙情詩は、書簡詩の形をとったり、個人アルバムに書き込まれたりしたが、友人知人の前で朗読されることも多かった。例えばカフカース行の直前に作った「むら雲」がそれである。「空なるむら雲よ 永遠の放浪者たちよ! 瑠璃色の草原となり 真珠の鎖となり 私と同じく追放されたものたち。君らは懐かしい北から南の彼方をめざして走る。(中略) 永遠にひややか 永遠に自由なるものたち 君らには祖国もなく 君らには追放もない。」(2-79, II-207) レー

ルモントフはバラントとの決闘により、再びカフカースへの配転を余儀なくされた。1840年の春カラムジン家で送別会が開かれたが、その時彼は窓辺から雲を眺めてこの詩を作り、一座の前で朗読した。このように彼の叙情詩は少なからずが自身の人生の一コマを反映しており、即興性とパフォーマンス性を備えていた。強い生の感情が直裁に表現されているこれらの叙情詩は、人の心に強く迫る力を持ち、それゆえ後世にまで多数の愛読者を見出すことができた。

2. ロシアに寄せた叙情詩

「さらば 垢にまみれたロシアよ 農奴たちの国 地主たちの国よ 空色の軍服を着た者たちよ 彼らの意のままになる民衆よ。わたしはカフカースの山々の向こうに 身を隠すことだろう あなた方を支配する者たち その千里眼や地獄耳から逃れて。」(2-105、II-165)

この短い詩はレールモントフが最後にカフカースに配転させられた1841年に作られた。専制と農奴制を痛罵したこの詩は、彼の政治的叙情詩の代表作と見なされる。「千里眼」や「地獄耳」を持つ支配者の代表は憲兵隊長ベンケンドルフであり、彼を長とする強力な支配体制に対して国民は誰も抵抗することができない。この詩は隷属支配が貫徹している身分制国家ロシアに対する悲嘆と抗議の声として解釈できる。詩人の苛立ちは権力の濫用者だけにではなく、忍従に慣れて声を発せぬ人々にも向けられ、強い感情が一气呵成に表現されている。したがってこの詩はロシア人全体に対する訴えとして捉えることができる。

もう一つの重要な政治的叙情詩は、最初のカフカース配転をもたらしたプーシキン追悼詩「詩人の死」であるが、それはロシアの貴族層に呼びかけた詩として捉えることができる。この詩でレールモントフは、プーシキンがフランス人との決闘で落命を余儀なくされたのは貴族社会に責があると断じ、さらに、一旦完成した詩に、次の文言で始まる16行を追加した。「さて 卑劣さで知られた高名な父祖たちの傲慢な子孫たちよ 幸運の戯れに恵まれなかった家門の末裔たちを奴隷の踵で踏みじった者たちよ！ 飢えた群衆となって玉座の傍に立つ 自由と天才と名誉の死刑執行人たちよ！」(2-40、II-153)「自由」と「天才」と「名誉」の担い手であるプーシキンを殺害したのは一部の宮廷貴族と断定し、彼らを糾弾したのである。正にこの呼び掛けによってレールモントフは処罰され、この詩が強い政治的意味合いを帯びることとなった。

「詩人の死」は一時的な感情の発散ではなく、レールモントフの古くからの思念を表した詩であった。なぜならば彼はプーシキンへの信服を表白した次の詩を、すで

に1830年に作詩しているからである。「(前略) 気高い思想と心情を あなたは若くして自然から恵与された。あなたは悪を見たが 悪を前にして 平身低頭しなかった。暴君が脅し 刑罰が威嚇した時も あなたは自由を詠った。永遠の裁きだけを恐れ 地上の恐怖はものともせず に あなたは詠った。その時この地で一人の人間があなたの歌を理解していたのです。」(1-187) この詩のタイトルは「***に」であって、タイトルにも詞章にもプーシキンの名前は記されていない。しかし宛名人がプーシキンであることは、後の研究で明らかにされている¹⁴⁾。ここで大事なことは、二つの詩のテーマがほぼ一致していることである。このことから「詩人の死」は、プーシキンの決闘死を契機に、長期間胸に秘めてきたレールモントフの義憤が噴出し結晶した叙情詩として、捉えることができるのである。

しかしレールモントフが強い政治的志向性を持つ詩人ではなかったことも、付言しておかなければならない。スカビチェフスキーは彼が特定の政治思想とは無縁であったと主張し、次のように記している。「レールモントフは決して政治的詩人ではなかったし、何らかの意図的で偏向的な主義主張の表現者でもなかった。」¹⁵⁾ 彼のいくつかの詩は、その鮮烈なアピールによって、結果として後世に大きな政治的影響を及ぼしたが、作詩に際して彼自身がそれを意図していたとは想定できない。基本的に彼は自己の体験と実感を最も重要視した詩人であったと考えられる。

上記三作とは別の政治的意味合いを持つ叙情詩として、長詩「ヴァレリク」がある。それは己の感覚を素直に反映させた特異な戦争記録であり、トルストイやガルシンによる戦争描写の先駆けになった作品と言われる。この詩は艶やかな社交界で活躍する一女性宛ての書簡体形式をとっており、その独特の形式によって、深刻な題材を扱っているにもかかわらず、一般の人々にも親しみやすい文学作品となった。1840年7月11日にカフカースのヴァレリク川で、ロシア軍とチェチェン軍との間で戦闘が勃発した。この戦闘に参加したレールモントフは、詩と絵画の両方で、自分の貴重な体験を後世に残した。叙情詩「ヴァレリク」の中で、負傷した主人公は戦場に臥して瞑想し、カズベク山を仰ぎ見つつ、次のような感慨をもらす。「人間は哀れだ 何を欲しているのか！ 空は晴れ 空の下に土地は広く 全てに足りている。しかし人間だけが絶えず虚しく反目している。なぜだ？」(2-93) この詩は「社交の快楽を味わい」、「人の死に様を一度も見たことがないであろう」貴族女性に送られており、しかも次の一句で結ばれている。「(私の手紙を) いたずらとしてご容赦ください。そして小声で『変な人！』っ

て囁いてください。」読者は、戦場で生死の間をさまよう軍人と、都会で遊ぶ特権貴族との対比を、鮮やかに感じ取ることができる。詩の形式そのものが、ロシア社会に遍在する極端な落差を照射しているのである。個人宛の形式をとってこそいるが、この詩はロシア人全て、さらには人類全てに向けたメッセージ性を含んでいる。

3. 自然に寄せた叙情詩

「黄ばんだ草の葉が広野に舞い散る。針葉樹林に垂れたトウヒだけが暗い緑を保っている。懸崖の下の花園に休んで日中の労働を避けることも もはや農夫は求めない。獐猛な獣もやむを得ずどこかへ急ぎ身を隠す。朧月が夜に霞む広野を銀色に輝かせる。」(1-11)

1828年作の「秋」と題されるこの詩は全集の初頁を飾っており、レールモントフの処女詩と見なされる。注目すべきことは、この最初の詩で示された自然界に対する眼差しが、彼の生涯にわたって変わらず保たれたことである。変化する自然の姿、そこに生息する人間や動物の生き様、月明かりの中の神秘的光景。純朴なこの短詩は、彼が生涯愛して止まなかった、自然界の総体的な営みを描出しており、その後の叙情詩の方向性を示している。

レールモントフは多くの叙情詩で自然を愛でたが、詩作の対象となる自然は主としてカフカースである。カフカースの自然が最も早く詠われた詩の一つに、1829年の「チェルケス娘」がある。「私はお前たちを見た 丘や畑 山々の多彩な木々たち 荒々しい自然の美しさ 清閑な草原に住む幸せな人々 そして物静かで純朴な気性！しかしチェレク川が流れる場所で私はチェルケス娘を見た。娘のまなざしは心を虜にした。思いは知らず知らず遠ざかり いとしい遠くの絶壁をさまよう。(後略)」(1-32) 彼は山、川、森、草原などの自然そのものの魅力に惹かれたが、しかし彼にとって、人間や動物が加わることによって、自然はいっそう輝きを増した。自然と離れている時でさえも、自然はいつも思いの中にあった。1830年の「カフカース」と題される詩では次のように語られている。「山々の溪谷よ 私はあなたたちと一緒にいたとき 幸せだった。5年経ったが いつもお前らを慕っていた。」(1-96) 自然の観照は彼にとって慰安であり、特に天体が重要な意味を持っていた。「光れ光れ 遠くの星よ 夜毎に私が会えるように。お前のかすかな光は闇と戦って 私の病める心に希望をもたらす。(後略)」(1-111) 自然観察は四季の折々、一日の微細な変化に及んでいる。「夜が明けて 鬱蒼とした山々を 夜霧が灰色のヴェールで覆う。カフカースの麓はまだ静か 家畜の群れは黙し 川だけが水音をたてている。(後略)」(1-119) 自然の表現方法には様々な工夫が凝らされており、次のように、日本の短歌を思わせる簡潔な詩もある。

「静寂 池の水面が風に吹かれ満月がきらめく。岸边近く 波が冷たい光と戯れる。」(1830年、1-144) 言外に意味を含ませ、余韻を大切にする傾向が、若い日の詩作に早くも現れている。

自然を愛でるに留まらず、自然と融合し一体化する境地も叙情詩で詠われている。人間と自然の関係を寓意的に描いた詩「自由」が1831年に作られており、それは東洋のフォークロアからの影響を強く感じさせる作品である。「(前略) 神が私に若い妻を与えてくれた それは自由 いとしく比類ない自由。妻と共に父母が現れ 家族ができた。母は広い草原 父は遠い空。二人は私を養い かわいがってくれた。私の兄弟は森の白樺と松。私が馬で疾走すると 草原が答えてくれる。遅くまでさすらっても 空を月が照らしてくれる。夏には兄弟が日陰へと招いてくれる。遠くから手招きし 会釈してくれる。自由が私に巣を作ってくれた 広大無辺の世界のような。」(1-224) 実の父母兄弟に愛されない主人公は神から若い妻、すなわち自由を与えられた。月明かりの中、主人公は草原を馬で走る。夏には兄弟である木々が日陰を供してくれる。自由という妻を与えられたことによって、広大無辺の自然が主人公の家族となったのである。これを作詩した時のレールモントフの心も、自然と完全に融合していたように思われる。彼にとって自然は自由と同一概念であり、その対概念として、恐らく煩雑な都会生活があったものと思われる。彼は自然を深く洞察し続け、自然表現に様々な方法を試みた。そしてそれが晩年の傑作叙情詩へと繋がった。

4. 絵画と叙情詩の関連性

「私は祖国を愛する それは不思議な愛情によって！私の理性もその愛に打ち勝つことはできまい。血であがなわれた栄光も 誇り高い信仰に満ち満ちた安静も 混沌とした古代の予言に満ちた伝説も 喜ばしい夢を私の中に揺り動かさしめない。けれど私は愛する どうしてか自分でも分からぬまま。祖国の草原の冷たい沈黙を 祖国の森林の果てしないゆらめきを 祖国の河の 海原にも似た雪どけの水を。私は愛する 村落の道に四輪馬車を駆ることを そして 夜の闇をじっと見据えながら しきりと宿を求めつつ 物悲しい村々の震える灯りが 両側に現れてくるのを迎えることを。私は愛する 焼き畑の煙を 草原に宿る荷車の列を 黄色く実った畠の さなかの丘に 白々と立つ一對の白樺を。多くの人々の 味わったことのない喜びの心で 私は 一杯に詰まった穀物小屋を わらぶきの百姓家を 彫刻模様の鎧戸の窓を 眺める。そして 露のおりた祭りの日の夕べ 足を踏み 口笛を吹き鳴らす踊りを 酔っ払った百姓たちの さんざめくさなかで 真夜中までも 見つめていたい

と思う。」(2-95、II-209)

これは1841年の作品「祖国」の全文であるが、この詩の眼目は冒頭に掲げられている。すなわちここでレー尔蒙トフは常人とは異なる祖国愛を宣言しているのである。彼が愛したのはロシアの自然であり、そこで暮らす人々の営みである。祖国の栄光も宗教も彼の心を揺すぶらなかった。そして彼が愛したものの内実は、これまで「外向的叙情詩」として紹介してきた詩群の内容と重なっているのである。

愛する対象の表現手段として、レー尔蒙トフには叙情詩と共に絵画があった。全集第8巻に掲載された絵画は油絵14点、水彩画43点、素描168点に及んでいる。チョークを手にした幼子の肖像画から知られるように、彼の描画は幼児期から始まり、学生時代には二人の画家ソロニツキーとザボロツキーに師事し、それ以降も生涯絵筆を離すことはなかった。キャンバスだけではなく、ノート、手紙、原稿、そして知人のアルバム等々、日常生活の様々な媒体に描いており、言語表現と絵画表現が彼の中で密接に結びついていたことが推測される。

レー尔蒙トフの絵画の研究者パホーモフは、彼の絵画をテーマ別に6種に分類している¹⁶⁾。すなわち戦争画、風景画、人物画、イラストレーション、カリカチュア、及び人馬の頭部デッサンである。これらの中で叙情詩と関連が深いのは、人物画、風景画、戦争画、そしてカリカチュアであるので、これらについて順に紹介してみよう。

人物画の対象はモンゴ・ストリピンやオドーエフスキーのような親戚・友人を初めとして、学友や同僚の兵士、そして社交界の紳士淑女等々多彩である。農民も含め、彼が触れた雑多な人々すべてが題材となっている。特に注目すべきは異民族を描いた人物画である。わずか3点に過ぎない油彩人物画の中で、1点はチェルケス人の肖像画である。水彩画ではたくさんの異民族が描かれている。特にターバンを被った東洋人(23)¹⁷⁾は精悍な風貌が印象的である。カフカースの山岳住民はいずれも人間としての尊厳を保った、凛々しい姿に描かれており(24, 25, 62)、叙情詩におけると同じく、民族的偏見に些かも害されてはいない。

風景画はカフカースの自然を主題にしたものが大半である。油絵に関して言えば、14点の中で10点までがカフカースの山河に捧げられている。いずれも1838年ごろ、つまり最初のカフカース配転の時期の作品である。一方水彩画と素描についてみれば、自然の多様な姿が、人間の様々な営みと共に、多くの絵画で描かれている。以下に、上述の叙情詩「祖国」と題材が共通する絵画を、作品番号によって示しておこう。森(151、154)、一對の

白樺(6)、馬車と川(33、133)、村道や街路を走る馬車(113、125)、軍事演習(13、141、159)、水車小屋(14)、地方都市(68、172~75)、馬車と建物(76、91、121、125、146)、村と家(85)、村に入る騎士(99、113)、農家と百姓(132)、宿屋(147)、村(151、154)。これらは風景画であると同時に風俗画としての側面をも有しており、その意味でも叙情詩との共通性が明らかである。

戦争画としては、ヴァレリク戦を描いた二点「1840年7月11日ヴァレリク戦のエピソード」と「ヴァレリクにて1840年7月12日死者の埋葬」がある。あるロシア人研究者が主張するように¹⁸⁾、それらは戦争画家としてのレー尔蒙トフの偉大な才能を証明している。両者は叙情詩「ヴァレリク」と不可分の関係を成しており、詩と絵画が互いに補完的な役割を果たしている。

最後のカリカチュアは叙情詩と共に、物語や戯曲とも深い関連性を持っている。初期のものとしては、「ヴェレシチャーギナ・アルバム」に納められた10点(44-53)がある。身近な人々が軽快な筆致で描かれ、中には、日本の漫画のように、登場人物が台詞を発している場合もある。作曲家ダルゴムィシスキーを描いたとされる「文官と武官」、「若い婦人と燕尾服を着た男性」がその例であり、また1837年の作「旅の思い出」と「スタヴロポリ生活の一場面」でも台詞が加えられている。これらは連続コマ漫画の一步手前、すなわち物語が動き出す寸前で留まっている。最晩年の2作「鷺の前で」と「騒乱に向けて疾走」は意味深長である。前者は忠誠心の揶揄であり、後者はペテルブルグ総督の戯画であると見なされる。

II 内向的叙情詩

外界の観察者レー尔蒙トフは内界、すなわち人間精神内部の観察者でもあった。自分自身の内面の観察と分析を通じて、人間が共有する精神世界を深く多面的に考察したのである。彼の関心は特に人間の悪、すなわち人間精神の否定的な側面に向けられた。それは彼の小説や戯曲に反映されたが、当然のことながら、多くの叙情詩にも反映されている。思索的傾向が色濃いこれらの詩群を内向的叙情詩と称して、考察してみよう。それらは外向的抒情詩と対を成しつつ、彼の叙情詩の主軸を形成している。

彼の内界への志向性を三種類の観点から考察することが可能である。第一は、人間の空想力を高く評価した点である。彼は空想力に積極的な意義を与え、人間生活に必須のものとして位置付けた。第二は、人間の否定的側面を直視したことである。理想化された人間像に異議を唱え、その逆を強調することによって、善悪を併せ持つ

真実の人間像に迫ろうとした。第三は、人間の否定的側面を人格化しようとした点である。「デーモン」という形象を叙情詩や叙事詩に登場させることによって、人間性に巣くう悪の側面を際立たせて見せた。

1. 空想世界への意義付け

「いつもいつも 色とりどりの人群にかこまれ さながら夢見心地で 音楽と雑踏のざわめき 繰り返し激しく囁かれる言葉を聞いている 私の前に 人々の冷酷な姿が 礼儀正しく脱ぎおろした仮面が ひらめいている。(中略) そして ふとした瞬間 我とわが身を忘れるとき 記憶をたどり 幾年かの昔へと 私は自由な自由な鳥のように飛んでいく。(中略) はっと我に返ったとき 私は虚偽に気づく。人群のざわめきが 私の空想を 祭りの日の招かれざる客のように 追い払う。おお 何とかしてあいつらの喜びをぶち壊し あいつらの目に鉄の詩の一行を 猛々しく投げ込んでやりたい 悲哀と憎悪に浸された一行を！」(2-69、II-186)

これは1840年の作品「1月1日」の一節である。レールモントフにとっての空想の意義が、ここで見事に表現されている。主人公は虚飾に満ちた仮面舞踏会にあって、違和感と疎外感を覚え、いつの間にか幼児期の空想世界に没入する。甘美な空想世界が現実のざわめきによって妨げられたとき、彼は周囲に対して鋭い敵意と憎しみを覚える。舞踏会での疎外感をテーマにした詩は当時のロシアで珍しくなく、たとえばデカブリスト詩人でレールモントフの友人でもあったオドーエフスキーの「舞踏会」¹⁹⁾ (1825年) が有名である。しかしオドーエフスキーの詩では、青年貴族が舞踏会で覚える疎外感だけが強調されており、レールモントフのこの詩とは訴える内容が本質的に異なっている。レールモントフの場合には、社交界に対する違和感が示されると同時に、空想世界に浸ることの権利が、犯しがたいものとして主張されている。彼にとって空想世界は、現実世界と同等の価値を持っていたのである。

空想癖はレールモントフ自身が自認していたものであった。長詩「1831年6月11日」に次の一節がある。「忘れもしない 私の魂は 子供の頃から 怪しいものを求め続けた。(中略) どんなにたびたび 空想の力によって 束の間のうちに 私は 幾世紀もの 別の生を生き この世のことを 忘れはてたことだろう。(後略)」(1-206、I-259) スカビチェフスキーは彼の空想癖が幼児期の病気に起因すると主張し、未完の小説の主人公サーシャ・アルペーニンにレールモントフを仮託しつつ、次のように記している。「この病気はサーシャの知性と性格に重要な結果と奇妙な影響をもたらした。彼は思索癖を身に着けたのである。(中略) 空想が彼にとって新たな遊び

となった。」²⁰⁾ こうしてレールモントフは空想世界に遊ぶことを好むに至り、しかもそれだけでなく、人間の空想力に積極的な意義を見出したのである。彼にこの特性があってこそ、魅惑的な幻想物語、ファンタジーが創造されたのであろう。レールモントフにとってはこのような情緒的な空想世界は避難所であり、喜びでもあったが、しかし他方で、彼の内界への志向性には、それとは正反対の、暗い陰鬱な側面が含まれていた。悲観的で厭世的な叙情詩が、そこから数多く生まれたのである。

2. 悲観的な叙情詩

「(前略) 私は苦難の息子。父は死まで平安を知らなかった。母は涙にくれてみまかった。二人から一人残された私は 祝宴の中での余計物 枯れた古株に生えた若芽。青く茂っても樹液は流れず 死神の娘には死が運命付けられている。」(1-239)

レールモントフが厭世的な世界観を持つに至った原因の一つとして、彼の育った特殊な家庭環境が挙げられる。上記引用文は1831年に作詩した「スタンザ」の一部であるが、こう記されているように、彼は2歳で母を、17歳で父を失った。しかも父と祖母との軋轢に起因して、彼は父との接触もままならなかった。このような幼少期の辛い経験が彼の厭世主義の一因になったであろう。

もう一つの原因は当時のロシアの特殊な状況であったと考えられる。レールモントフはすでに1829年の作「モノログ」で、ロシア社会の閉塞状況を、次のように描写している。「(前略) 私たち 北方の子は この国の草花のように そそくさと花を開いて すぐに枯れてしまう。灰色の地平線の上の 冬の太陽のように 私たちの人生はどんよりと曇り その単調な流れは 長くは続かない。(後略)」(1-43、I-249) 同じ嘆きが、1838年の作品「思い」の中で、より強い絶望感を込めて繰り返されている²¹⁾。「僕は悲しい思いで同世代を見る！その行く末は空虚であるか 闇であるか いずれにしても僕らは知識と疑惑の重荷に押し潰されて 無為のうちに老いさらばえるだろう。(中略) 僕らは陰気な すぐにも忘れられる群れをなして 騒ぎもせず 跡も残さず 世界の上を通り過ぎて行くだらう 実りある思想も 天才の始めた仕事も 後世に引き継ぐことなく。」(2-58、II-170) 既述のように、死亡した年の作品「祖国」の中で、レールモントフはロシアへの愛を詠いはしたが、それは限定的な愛であり、ロシアの自然と人間生活だけへの愛であった。閉塞的なロシアの政治状況は、生涯彼を苛んだに違いない。

しかし彼の厭世観は特殊な生活環境や時代の特徴的な状況によってのみもたらされたものとは考えられない。それはより普遍的な性格を帯びており、人間性そのものに

も起因するものと見なされる。1929年に「返事」と題される詩が書かれているが、そこには、思春期の若者が永久に反復するであろう煩悶が、次のように提示されている。「ある時苦悩を知って 愛に臉を閉ざしたものは 恐怖にも希望にも 二度と反応しはしない。彼は引きこもって闇を好み もはや涙と無縁である。夢は無益で虚しく陶酔も消えた。彼は感情を失い 雷光に打たれて燃え尽きた木株のように 生氣を失ってしまった。命の水は失せ 枯れ枝に養分は伝わらない。運命が彼に刻印を押した。」(1-33) これはレールモントフが15歳の頃の作品であるが、己の体験が基になっているであろうこの詩文には、多くの人間が青春期に体験せざるを得ない深い苦悩が込められている。彼は人間の生から死までの全過程を冷徹に観察し、その理想化を頑なに拒んだ。人間の死を描写するに際しても、徹底して冷徹であり、宗教的な死生観からは遠く隔たっていた。バイロンの詩を翻案した「夜Ⅰ」(1830年)という詩には、次のようなグロテスクな描写が見られる。「棺で私の体は朽ち 骨 肉 血管も崩壊(中略) 絶望しつつ眺めると 昆虫が群がり 食欲旺盛。蛆虫は眼窩に出入りし しゃれこうべに身を隠す。」(I-101)

こうした露悪的な傾向を帯びる一方で、レールモントフには絶対的な存在に対する強い願望が潜んでもいた。1831年に作詩された「空と星」は次のような内容である。「夕べの空は清く 遠くの星々は澄んでいる。幼児の幸せのように澄んでいる。ああ! どうして私はこう考えてはいけなのだろう 星たちよ お前は私の幸せと同じように 澄んでいる と! なぜ不幸なの? と人々は私に尋ねる。私が不幸なのは そう 星と空は 星と空であり 私は人間だからなのです! 人々は互いに羨みあう。反対に私は美しい星だけを羨んでいる。星に代わることだけを願っている。」(I-229) 星や月になれない哀しみ、人間でしかありえない哀しみがここで訴えられているが、絶対的なものへの憧れを示す詩句は他にも多くある。例えば、前にも引用した「1831年6月11日に」という長詩に、次の一節を見出せる。「ただひたすらに人間の中でだけ 神聖なものと罪深いものとが出会うことができるのだ。人間の苦しみのすべては 実にそこから来ているものなのだ。」(1-206、I-268) この詩の中には、人間の苦悶は天使と悪魔の中間に位置する人間の宿命である、という主張も示されている。

3. デーモンの生成と生長

「彼の成分は悪の塊。雲海を飛翔しつつ 彼は 破滅の嵐 川の泡 木々のざわめきを愛す。彼の不動の玉座は 吹き飛ばされた枯葉の中。寒風を浴びつつ 彼はその中に陰鬱な暗い表情で座している。彼は不信を吹聴し

純愛を軽蔑し 全ての祈りを拒絶し 流血を冷淡に眺める。(後略)」(1-36)

レールモントフは1829年に叙情詩「私のデーモン」を作り、デーモンを初めて登場させた。当時のロシアでこの用語は目新しいものではなく、たとえばプーシキンも「デーモン」を1823年に作詩している²²⁾。プーシキンの詩の中でデーモンは、人の心に憂鬱の影を落とす意地悪い霊として描かれている。レールモントフもまたこの形象を数編の叙情詩に取り入れ、さらに叙事詩『デーモン』へと発展させた。

叙情詩の中でデーモンは次第に作者自身と同一視されていく。レールモントフは自分自身をデーモンに仮託していったのである。「私は天使になるべく生まれたのではない」(1830年)で始まる詩には、次のような描写がある。「(前略) 私のデーモンと同様に 私は悪により選ばれたもの。デーモンと同じに 傲慢な心を持ち 人々の中にあっては無思慮な異邦人 地とも天とも無縁である。(中略) 私と彼は同一であると信じよ。」(1-52) この時期にはデーモンと同一の性格を持つ形象が、他の幾つかの詩に登場している。例えば「シルエット」(1-59)がそうである。「瞳に命も炎もなく 永遠に私の側にいる」と描写されるシルエットは、デーモンと同一物と想定される。また「絶望と悪の霊として お前は私の心を捕縛した」(1-60)で始まる作品もあり、この霊もやはりデーモンに酷似している。1931年には「私のデーモン」が改作されている。長さが二倍になり、デーモンの反人間的な性向が詳述され、次のように、デーモンと自分との運命共同体性が主張される。「(前略) 私が生きてる限り 誇り高いデーモンは私から離れないで 私の頭脳を不思議な炎の光で照らし始めるだろう。完成の姿を見せてはくれても すぐさま永遠に奪い取ってしまうだろう。幸福の予感を与えてくれても 幸福そのものは決して与えてくれないだろう。」(1-263) このようにして、レールモントフはデーモン関連の詩群の中で、作者自身が悪であり、他者と対立する孤立者であることを強調する。

デーモンについては様々な解釈が存在するが、画家ヴルーベリはデーモン像を描くに際して、次のように語ったと言われる。「デーモンは悪の霊であるよりも、むしろ苦悩と悲哀の霊である。しかも支配権を持つ堂々たる霊である。」²³⁾ この言葉の通り、ヴルーベリが描いたデーモンからは、悪よりも、むしろ苦悩と悲哀の雰囲気強く看取される。人間の心を凝視し続けたレールモントフは、人間は善と悪を兼ね備えた中間的な存在であり、もしそうであるならば、そのような存在として生きるより他に術はない、という結論に達したものと推定される。

レールモントフにとってデーモンの生成と生長は、絶対者への憧れを放棄していく心境の経過そのものであったのかもしれない。

1829年から10余年の長きにわたって推敲された叙事詩『デーモン』は、宇宙をデーモンと天使が飛び交う気宇壮大な物語であり、カフカースの大自然を舞台に幻想的な世界が展開される。ここでもデーモンは「知識と自由の王」でありながら、「天上の敵」、「生まれながらの悪である男」、「希望を滅ぼす」「愛されぬ男」と形容され、孤独に苦しみ、煩悶する。デーモンはやはり中間的な存在であり、次のように表現されている。「彼は晴れやかな夕べに似ていた。昼でもなく夜でもなく 闇でもなく光でもなかった！」(4-237、II-p355)

デーモンの形象を追跡することによって、レールモントフは人間の心の闇の部分、暗いネガティブな側面を照射した。理想化を廃することによって、彼は従来の人間観察をより豊かで公正なものとしたのである²⁴⁾。

III レールモントフの叙情詩における西洋と東洋

トレジャコフスキーやロモノーソフに始まったロシアの近代詩は、スマローコフ、デルジャーヴィン、ジュコフスキー等を経てプーシキンに至り、彼において世界的な水準に達した²⁵⁾。この成長は西洋の優れた文学に学ぶことで進展し、特にジュコフスキーは西洋諸国の優れた詩を流暢なロシア語に翻訳することで、古今の傑作をロシアに広く普及せしめた。このようにロシアの近代詩は従来は西洋からの受容が主流であったが、こうした状況にあって、レールモントフは西洋に学びつつも、東洋からも滋養分を摂取することで、新しい流れを形成した。文学研究者エイヘンバウムがレールモントフの作風を「折衷主義」と名づけ、他者の作品を自作に混入させることが彼の創作の特徴であると主張したように²⁶⁾、レールモントフはロモノーソフ、ドミトリエフ、コズロフ、バチュシコフ、ジュコフスキー、プーシキン等のロシア詩人から多大な影響を受けた。しかし彼はそれと同程度に、もしくはそれ以上に、西洋諸作家の作品に親しんだ。それだけではない。彼は東洋の文化を高く評価して、その吸収に積極的に努めたのである。彼の晩年には、枯淡の境地に達した、滋味豊かな傑作が生まれたが、それらは西洋の新しい詩や東洋のフォークロアから養分を吸収し、自家薬籠中の物とすることによって、生まれたのである。そこで次に彼が西洋と東洋の文化を吸収した状況について、個々に調べてみよう。

1. ジュコフスキーへの批判と東洋への評価

レールモントフの西洋観と東洋観は先輩詩人ジュコフスキーとの関係を調べることによって、ある程度明らか

にされる。ジュコフスキーはレールモントフの良き理解者であり、庇護者でもあった。レールモントフはこの大詩人を尊敬し、頼りにもしていたが、彼の創作方法に対しては批判的な見解を持っていた。彼は自身で作詩もしたが、外国詩の翻訳や翻案が圧倒的に多く、しかも当時の習慣に従って、原作者の名前を記さないことが多かった。1841年春、カフカースから戻って一時的にペテルブルグに滞在していたレールモントフは、退役して文学に専念する方途を求めている。彼はある時、雑誌『祖国雑記』の編集者であり友人でもあったクラエフスキーと会談したが、その会話の中で次のように語っている。「我々が雑誌で社会に提示するのは、翻訳ではなく、自分の作品です。私は何らかのオリジナル作品を毎号に寄稿することを引き受けましょう。ジュコフスキーとは違います。彼はいつも翻訳をたくさん供給して、しかも出典を語らないのです。」²⁷⁾ 翻訳が中心であったジュコフスキーに対するレールモントフの強い苛立ちがこの文章から明らかである。彼が希求したのはあくまでオリジナル作品であった。同じ会話の続きにおいて、彼は自分独自の創作の方向性を示唆する次のような発言もしている。「我々は己の主体的な生き方をして、己の独自性を全人類に施さなければならない。なぜ我々はいつもヨーロッパやフランス人に追いついていこうとしなければならないのか。私はアジア人から多くを学びました。そして私はアジア人の世界観の内奥を極めてみたいものです。その根源はアジア人自身にも我々にもまだほとんど理解されていないのです。しかし確かなことなのですが、東洋には豊かな啓示が秘蔵されているのです。」西洋への追従を嫌悪し、ロシア人として独自の作品の創造が必要と考えたレールモントフは、東洋に学ぶことの必要性を実感したのであろう。東洋のフォークロアへの強い関心も、このような心境と関連していた。ところでレールモントフにとって東洋とは、主としてカフカース以南の地域を指していた。それは叙情詩「論争」の内容から明らかである。シャト山との論争でカズベク山が東洋の地域名と民族名を挙げており、グルジア、テヘラン、エルサレム、ナイル川、さらにベドウィン人が住む所すなわちアラビアが告げられているのである。ロシア軍の目的はカフカース地方の支配であったから、レールモントフの知的関心は敵や味方の区別に左右されなかったことになる。

ジュコフスキーとレールモントフの関係を考える上で興味深い事実がもう一つある。それはこれよりはるか以前に、レールモントフがジュコフスキーの翻訳作品をパロディ化したことである。1832年にジュコフスキーはドイツの詩人ウーラントの原詩を翻訳したバラード「年老的騎士」を発表したが、程なくレールモントフはそれ

のパロディ化に挑戦した。「年老いた騎士」の全文を次に引用するが、それは今なおジュコフスキーの代表作の一つに数えられている。

「青春を彼は理想郷パレスチナに赴き 栄えある多くの日々を戦乱の中で過ごした。そこで彼は聖なるオリーブから一枝手折り 鉄兜に枝を結えた。枝を身につけて彼は異教徒の敵と戦い 栄光に包まれて我が家に枝を持ち帰った。その枝を彼は故郷の地に移植し しばしば泉の水を散布した。彼は老いて白髪となり体の力も衰えた。しかしオリーブは若枝から育って成木になった。木の下にしばしば彼は一人座し 心を霊妙な夢に浸らせた。頭上ではパレスチナのオリーブが友のように白髪を包み 枝葉が音を奏でた。夢の中で音を聞きつつ 彼は強く懐かしがるのだった、栄光の昔日と遠方の土地を。」²⁸⁾

ここでは理想化された人生と人物像が描かれており、この詩の読者はほのぼのとした読後感を持つことができるだろう。次にレールモントフのパロディ詩を紹介してみよう。未完と見なされているが、以下はその全文である。

「サラセン人が刻んだ鋼の兜を被って 彼は聖地パレスチナの丘に赴いた。燃える頬で聖地に着いたが 禿頭の敗北姿で故郷に戻った。異教徒を両手で粉碎し 妻も老人も幼児も容赦しなかった。彼と出くわして美女たちは狼狽した。彼は彼女らを再三***し ロザリオを失敬した。栄誉も富も持たずに自宅に戻ってみると 子供が大騒ぎをし 妻は孕んでいた。老人は殴り殺され……」(2-26)

ジュコフスキーによる理想的な人間像の描写に対し、このパロディ詩はまったく反対の人間像を示して見せて、露悪的なレールモントフの一面を際立たせている。この詩の読者は不快感を覚える一方で、人間の現実とはこのようなものであり、歴史的事実もさもありなん、との感慨を懐くだろう。ジュコフスキーの理想主義に慣れ親しんできた読者は、冷徹なレールモントフの人間観察によって、バランスを取り戻すことができるのである。これは20歳前後の作品であり、レールモントフのシニカルな側面を見事に表している。

2. 西洋文学の内化

『レールモントフ辞典』はレールモントフによる西洋文学の翻訳活動を三期に分けて紹介している²⁹⁾。第一期は1829年から30年頃にかけてで、ドイツ語からの翻訳が中心である。第二期はイギリス文学の翻訳が中心で、1830年から36年にかけてである。第三期は晩年の2年間、すなわち、1840年から41年にかけてであり、ゲーテやハイネの詩の翻訳が含まれる。この区分を参考にしつつ、レールモントフによる西洋詩の受容状況を概観してみよ

う。

1829年、15歳の頃レールモントフはシラーの詩を6点ほど訳している。その中には有名な「手袋」と「潜水夫」が含まれている。短い章句に物語が劇的に展開される両作品は、シラーのバラードの最高傑作とみなされよう。同じシラーの「揺り籠の子供」は、短歌にも似た、たった二行の短詩である。「幸せな子供！揺り籠でゆったりと。だけどやがて大人になると 世界も狭く感じられるのだよ。」(1-47) 物語性を予感させるこのような簡潔な詩を、レールモントフは好んで訳したものと思われる。この頃彼はゲーテの「漁夫」の訳も試みているし、また、『若きウェルテルの悩み』に触発されて作詩したとされる「遺言」を残している。ドイツを代表する二大詩人の傑作にレールモントフが若き日に習熟した事実は、簡潔で劇的な表現技術を学んだ点で、大きな意義を持ったに違いない。

第二期はイギリス詩人の翻訳が中心である。レールモントフはトーマス・ムアによるパイロン伝に感激して、パイロンへの関心を深めていったが、ムア自身の詩からも多大な影響を受けている³⁰⁾。パイロンの翻訳として先ず注目されるのは、「闇」その他を自由訳した「夜」と題される2作品である。両作品は暗い思索的な叙情詩であるが、反対に物語性を帯びた作品もパイロンから幾つか翻訳している。1830年の作品「バラード」は、『ドン・ジュアン』の第16歌40連から翻訳しており、大幅な改編と省略がなされている。1832年には『マゼッパ』第5章の断片を翻訳しているが、これにも大幅な変更が加えられている。1936年には『チャイルド・ハロルド』からの訳出を試みている。「瀕死の剣闘士」がそれで、原作の第4巻の140章と141章とが、部分的に訳されている。レールモントフはパイロンの長大な3編の叙事詩からこれらの翻訳を試みたわけであるが、翻訳箇所を選択に当たっては、彼自身の趣向が顕著に反映されたものと考えられる。訳文に関しては、原文にとらわれずに、自分自身の思念を自在に混入させており、翻訳と創作の両要素が兼ね備えられている。

第三期は死を前にした時期であり、この時期の翻訳は、数こそ少ないが、極めて重要である。1840年の「空飛ぶ船」はドイツの詩人ツェドリックの詩「幽霊船」からの翻案であり、ナポレオンが幻想的に描かれている。同年の「ゲーテより」と題された詩は、次のような短詩である。「峰々は夜の闇に憩っている。静かな谷々は澄んだ霞に満ちている。道はほこりをたてず 木の葉も動かない。しばし待て おまえも憩うだろう。」(2-77) これは、ゲーテの「旅人の夜の歌」二連作からの自由訳であると考えられている。この時期にはまたハイネの短い作品を

2点翻訳している。最初の作の全文は次のようである。「たがいに愛していたけれど 愛しているとは云わなんだ つれないふりしていがみあい 心じゃ焦がれて死ぬばかり。とどのつまりは別れちゃい 夢に時おり会うばかり 二人はとくに死んだけど それさえたがいに知らなんだ。」³¹⁾ この詩の訳出に際して、レールモントフは最終部を次のように変更した。「死後に生まれ変わっても、二人は互いが認知できなかった。」二人の関係を死後の世界に拡張することによって、訳詩は原作とは違ったニュアンスを与えられているのである。もう一つは、ハイネが1827年に刊行した『歌の本』所収の「松と椰子」の翻訳である。「厳しい北の土地 赤裸な山頂に たった一つ 松の木がたちはだかり ゆらゆらとまどろみ 乾いた雪を 法衣のようにまとっている。そして 松は 夢見続けている 遠い荒野 太陽が昇り来る地方 燃えるような絶壁の上に 一人悲しげに 見るも美しい椰子のそばでいるのを。」(2-78、II-217) この詩を訳した後1841年に、レールモントフは「絶壁」と題する詩を作った。両者は形式も内容も類似しており、ハイネの直接的な影響を感じさせる。「黄金の雲が 巨人の様な絶壁に 宿っていた。朝早く その雲は走り去った 瑠璃色の空に 嬉しげにたわむれつつ。けれど 年ふった絶壁の一本の壁に しっとりとした跡が残った。ただひとり 絶壁は立ちつくし 深い想いにふけり始めた。そして 荒野にあって ひそやかに泣き続けている。」(II-109、II-217)

エイヘンバウムはこの詩を「風景寓意詩 пейзажная аллегория」と称している³²⁾。雲の動きと絶壁の悲しみの簡潔な表現から、読者はある一つの景観を思い描くことができ、さらには、自分と他者との人間的な関係に思いを馳せることもできる。

レールモントフによる寓意詩の創作は晩年に始まったものではない。彼は寓意的な要素を含む詩をはるか以前に作っている。たとえば1832年作詩の「帆」がそれである。しかもこの詩のモチーフは、前年の作品「ねがいごと」と共に、シラーの詩「あこがれ」³³⁾と類似しており、両者に影響関係があったことを推測させる。レールモントフは若い頃から晩年に至るまで、ヨーロッパの優れた詩の影響を受け、それらを内在化しつつ、作詩を続けたのである。

3. 東洋のフォークロアの内在化

既述のように、レールモントフにとって東洋は中国や日本ではなく、カフカースとそれ以南の地域を指していた。特にカフカースは幼年期から数回訪問し、心の故郷とも言うべき地になっていた。学生時代にはペルシャ語やアラビア語の講義を受けており³⁴⁾、東洋への関心が幼

児期より継続していたことを証明している。処罰としてのカフカースへの配転も、彼にとってマイナス面ばかりではなかったように思われる。最初の配転を前にした1837年3月に、友人ラエフスキーに次のような手紙を書いている。「奇蹟の国、東洋について手紙を書くよ。偉人は東方に生まれる、というナポレオンの言葉で自分を慰めているんだ。」(7-53、II-351) この文面にはカフカース生活への期待感が率直に表現されている。軍人としてのカフカース生活は三度に及び数年間に亘っているが、その間に彼はこの地の自然や風俗に、そして特にフォークロアに関心を強めていった。当然の結果として、彼は東洋に因む叙情詩をたくさん残しているので、それらの一部を辿ってみよう。

東洋関連の叙情詩の創作はすでに学生時代に始まっている。カフカースを舞台とするバラード風の叙情詩を1829年前後から書き始めており、それらは各地のフォークロアからの影響が想定されている。例としては「グルジアの歌」(1-35)があり、そこでは老いたアルメニア人に囲われた若いグルジア女性の悲話が、簡潔に展開されている。地方の子守歌に触発されて創作された二つの叙情詩も強い印象を残す。一つはスラヴ女性が主人公の作品「バラード」で、1830年の作である。モンゴールとの戦いで負傷した夫が、子守唄を歌っている妻の元にたどり着くが、夫は妻の眼前で息絶える。妻は夫の土気色の顔を示しつつ、子供に復讐を求める。「ごらん 人が どう死ぬのかを そして女の胸の中で復讐を体得するのだよ！」(1-169) もう一つは有名な「カザークの子守歌」であり、カフカースのフォークロアを糧として1840年に作詩された。戦乱の時代に生きる母親が、わが子に戦闘の運命を予期して歌う、悲しくも勇ましい子守歌である。「(前略) お前は 姿りりしい勇士になるだろう カザークの魂を持ち。私はお前を見送りに出る お前は手を振る。私はその夜 痛ましい涙を とどめなくそっと流すだろう。お休み 私の天使 静かに心地よく ねんねんころりよ。(後略)」(2-70、II-189) 彼女の夫は今チェチェン人を相手に戦闘中である。せめて今は心安く眠れ、と子供に語りかけるのである。これら三つの叙情詩からは、独特の鄙びた東洋的情緒を感得できるだろう。

東洋を舞台とする晩年の叙情詩においては、レールモントフの自然観が表れ出ている。「物語風景詩 сюжетный пейзаж」³⁵⁾と称される民話風の作品で、そこでは自然自らが語ることで物語が展開される。代表作として「三本の棕櫚」、「テレク川の贈り物」(1939)、及び「論争」(1841)を挙げることができる。「三本の棕櫚」はユゴーの『東方詩集』(1829)の影響が指摘されており、「東方の伝説」の副題が添えられている。アラビア

の砂漠に三本の棕櫚が元気に育っていたが、やがて枯れ始め、棕櫚は神に向かって抗議する。しかしアラビア人のキャラバン隊がやってきて、棕櫚を根元から切断し、焼いてしまう。残った灰は風で砂漠に撒き散らされる。こうしてこの詩においては、自然の願いは人間によって無惨に退けられてしまう。「テレク川の贈物」は川と海の対話から成るが、それはグレベンスキー・カザークのフォークロアの利用が想定されている。テレク川がカスピ海に向かって、「休息の場所をくれ」と囁く。カスピ海が反応しないので、テレク川は「お土産としてカバルダ人の勇士を捧げる」と言う。しかしカスピ海は反応しない。そこでテレク川は、カザーク娘の亡骸を贈り物として約束する。娘の白い頭が川面に現れたとき、カスピ海は川の流れを狂喜しつつ受け入れる。「三本の棕櫚」とは逆に、この詩においては、自然と自然との衝突に人間が生贄として捧げられる結果となっている。もう一つの「論争」では、カフカースの二大高山であるカズベクとエルブルス(シャト)が論争する。カズベクにエルブルスが言う。「人間を恐れろ。自然が征服されつつある。特に東洋を恐れよ。」カズベクが反論する。「東洋はグルジアもテヘランもエルサレムもエジプトも、すべてまどろんでいる。」しかしエルブルスに促されて北方に目を向けた時、カズベクは驚嘆する。幾多の軍団が東方を目指して進んで来る。その数を数えようとしても、多すぎて数えることもできない。カズベクは雲に隠れて、沈黙してしまう。この詩では「三本の棕櫚」と同様に、人間による自然への侵略がテーマになっている。特にロシア軍によるカフカースの征服が暗示されている、とも解釈できる。

しかしこれらの詩の解釈にあたっては、レールモントフの心が人間の側にあったのか、自然の側にあったのか、考える必要がある。川や山や海や木々が自ら語る時、それを語らせる詩人の心は、人間の側ではなく、むしろ自然の側にあったのではないだろうか。読者は、人間に侵される自然の悲鳴を、これらの詩から聞き取ることができるのである。人間の立場からではなく、自然の立場から人間を位置づけることによって、レールモントフは人間と自然が運命共同体であることを主張している。

おわりに

2008年8月北京オリンピックの開催中に、ロシアとグルジアの間で紛争が勃発し、カフカース地方は戦闘地域と化した。この出来事は視察旅行を予定していた筆者の願いを出発直前に無惨に砕いたし、カフカース地方が今なお係争の地であることを人々に実感せしめた。ロシアによるカフカース地方への進出は19世紀前半に最大の高

まりを示しており、レールモントフの従軍は正にこの時期にあたっていたのである³⁶⁾。

マッシューク山麓での決闘で生涯を閉じたレールモントフは、カフカース地方と宿命的な因縁を持っており、それは彼の創作活動全体に決定的な影響を及ぼした。幼年期には1818年、1820年、1825年に祖母と共にこの地を訪れ、夏季を過ごしている。ペテルブルグに軍務の1836年春には、病気を理由にカフカースでの鉱泉治療を申請して却下された記録も残されており、この地への愛着を印象付ける。士官としての3度のカフカース滞在は、流刑に等しい屈辱的な配転によるものだったが、これも彼にとっては必ずしも受難ではなかった。それはカフカースに最後に旅立った際の彼の言動にも現れている。スラヴ派の思想家サマーリンは1841年の春に、カフカースへ旅立つレールモントフとモスクワで会談したが、そのときの感想を、「彼はカフカースを回想して生き生きとしていた」と、日記に記しているのである³⁷⁾。彼にとってカフカースは自然の聖地であり、魅力ある山岳民族の住処であり、フォークロアの宝庫であった。しかもそれらすべてが彼の創造の源泉になった。レールモントフは対比的な発想や表現を好む詩人であるが、彼の意識においては、カフカースは首都ペテルブルグと対立項を成していたものと想定される。軍務には流浪生活の側面が含まれていた。首都と僻地での二重生活は、優雅で奢侈な貴族の都会生活を味わわせると同時に、辺境諸地域の諸相を観察することを可能ならしめた。もちろんそれは豊かな自然と心行くまで接触する機会を彼にもたらした。彼の叙情詩の多くはこのような軍人生活があってこそ、可能であったと言える³⁸⁾。

現在ロシアではレールモントフの生誕200年を祝う記念行事が準備されつつあり、その一環として、伝記や著作に関する研究が、基本的諸事実の確認に立ち返って、再構築されようとしている。ロシアは専制から社会主義体制を経て、資本主義体制へと変遷を辿った。一見彼は遠い過去の作家となってしまったように思われる。しかし彼の著作は普遍的な価値を備えており、現代の読者にも訴える力をなお有している。ソヴィエト時代には主として社会批判的な側面が評価されたが、彼の価値はもちろんそれに尽きるものではない。そこで最後に、現代でも有益と思われる彼の創作上の特徴を、何点か指摘してみよう。第一に、彼の叙情詩には自己の体験に基づく鮮明な表現が与えられており、読者は己の過去を追体験することができる。すなわち彼の詩は、現代の優れたスナップ写真のように、人々の気持ちを代弁し、感情を喚起させる役割を果たしている。第二に、自らが体験した深い苦悶を赤裸々に表現することによって、彼の詩は悩める

人々の共感を呼び、青春の悩みの慰安者としての役割を果たしている。第三に、奔放な空想能力を発揮して、彼は幻想世界を詩文学の中に実現した。彼の叙情詩と叙事詩は、多くの絵画やデッサンと共に、ある意味で現代のアニメーションや漫画の世界を先取りしている。第四に、彼が東西両文化を内在化して達成した寓意詩は、簡潔にして多義的であり、高度な抽象性を獲得している。第五に、物語風景詩の中で人間を自然界の一部として位置づけたように、彼は多くの作品の中で自然と人間との運命共同体性を訴えている。

今回鑑賞した叙情詩は、彼の多数の韻文作品の中のほんの僅かでしかないし、しかも重要な彼の小説や戯曲は本稿の考察の対象外であった³⁹⁾。束の間の人生にあって彼の創作活動は多彩で、斬新な実験精神に満ちていた。夭折の詩人レー尔蒙トフは、彼が好きだった夜空の星のように、いつまでも不思議な輝きを放っている。

註釈

- 1) 佐々木照央『ラヴローフのナロードニキ主義歴史哲学』(彩流社、2001年)、34頁ほかを参照。
- 2) А. П. Чехов, Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах (М., 1974-1983), 12, 31を参照。
- 3) 今井博『レー尔蒙トフ 彗星の軌跡』(群像社、2004年)、「あとがき」を参照。
- 4) М. Ю. Лермонтов, Полное собрание сочинений в десяти томах (М., 2000-2002)
- 5) 『新明解国語辞典』(三省堂、1983年)より。
- 6) Т. Н. Прокопьева (ed), Жизнь и смерть Лермонтова (М., 2007), 5.
- 7) 主に次の文献に拠った。А. М. Скабичевский, М. Ю. Лермонтов, его жизнь и литературная деятельность (上記6の書物に収録)；М. Ю. Лермонтов, Полное собрание сочинений в десяти томах (М., 2000-2002) に掲載の年賦；今井博『レー尔蒙トフ 彗星の軌跡』(群像社、2004年)、アンリ・トロワイヤ著、福住誠訳『レー尔蒙トフの数奇な運命』(新読書社、2003年)、池田健太郎、草鹿外吉編『レー尔蒙トフ選集 I、II』(光和堂、1974、1976年)の年賦。
- 8) А. М. Скабичевский, 30.
- 9) А. М. Скабичевский, 36.
- 10) А. М. Скабичевский, 47.
- 11) Т. Н. Прокопьева (ed), Жизнь и смерть Лермонтова (М., 2007)、5. 編集者解説文。
- 12) カッコ内の数字は、前半はロシア語版全集の巻数と作品番号を、後半は日本語版選集の巻数と頁数を示す。この和訳を使用したのが、表現を変えた場合がある。和訳が不掲載の場合は前者のみ。
- 13) 例えば А. П. Чехов, 4, 251を参照。
- 14) М. Ю. Лермонтов, 1, 466を参照。
- 15) А. М. Скабичевский, 126.
- 16) М. Ю. Лермонтов, 8, с57を参照。
- 17) カッコ内の数字は全集第8巻の作品番号を示す。以下同じ。
- 18) Н. И. Терехов, «М. Ю. Лермонтов—художник», С. С. Серейчик (ed) Лермонтовские чтения-2006 (С. П., 2007), 128を参照。
- 19) Вл. Орлов, Декабристы антология в двух томах (Л., 1975) 1, 334-335を参照。
- 20) А. М. Скабичевский, 14.
- 21) 佐々木前掲書623-626頁を参照。
- 22) 小沢政雄訳詩集『露滴集』(群像社、1985年) 40頁を参照。
- 23) (画集) Михаил Врубель (М., 2001), 55を参照。
- 24) 次の論文を参照。Иеромонах Нестор, Опыт прочтения поэмы М. Ю. Лермонтова «Демон», Лермонтовские чтения-2006. また、マサリック著、石川達夫・長興進訳『ロシアとヨーロッパⅢ』(成文社、2004年)、236-238を参照。
- 25) 次の著書を参考にした。川崎隆司『ロシア詩の歴史』(恒文社、1993年)。
- 26) Б. Эйхенбаум, Лермонтов (Л., 1924) (England, 1977) 24を参照。
- 27) М. Ю. Лермонтов, 10, 219-220. なお今井前掲書172頁を参照。
- 28) В. А. Жуковский, Баллады и стихотворения (М., 1990) 316-317. なおジュコフスキーの翻訳活動については、白倉克文『近代ロシア文学の成立と西欧』(成文社、2001年) 第2章を参照。
- 29) Лермонтовская энциклопедия (М., 1999) 370-371を参照。
- 30) А. Н. Гиривенко, Из истории русского художественного перевода первой половины 19 века (М., 2002)、及び白倉前掲書180-181頁を参照。
- 31) 山口四郎訳『ドイツ詩集』(鳥影社、2000年)、29-30頁。
- 32) М. Ю. Лермонтов, 2, 355を参照。
- 33) 前掲山口四郎訳『ドイツ詩集』、91-93頁を参照。なお「帆」に関してはロシアで新しい解釈が主張されている。次を参照。И. П. Шеблякин, Проект «Лермонтовианы» и некоторые вопросы изучения творчества М. Ю. Лермонтова на современном этапе, С. С. Серейчик (ed) Лермонтовские чтения-2006 (С. П., 2007)。
- 34) М. Ю. Лермонтов, 8, 280を参照。
- 35) М. Ю. Лермонтов, 2, 302を参照。
- 36) マーチン・ギルバート著、木村汎・菅野敏子訳『ロシア歴史地図』(東洋書林、1997年)、59頁を参照。
- 37) М. Ю. Лермонтов, 10, 227を参照。
- 38) カフカースの記述に当たっては次の書が参考になった。大谷深『コーカサス』(ナウカ、1980年)。
- 39) レー尔蒙トフの小説を論じたものとして、次の著作がある。金子幸彦『ロシア小説論』(岩波書店、1975年)。